

スタンダード研究会会報

(2003) No. 13

2003.05.29.

目 次

- 研究会発表要旨
- ・ 「スタンダードにおけるジャンルの概念—旅行記を中心として—」 杉本圭子 …… 1
- ・ 「『アルマンス』執筆過程の検証」 (1) 内田善孝 …… 2
- ・ 「『バルムの僧院』に見る絵画の魔術と不在の美学」 小林亜美 …… 3

- 会員活動報告 …… 4

- 会員名簿 …… 5

- 後記 …… 6

スタンダードにおけるジャンルの概念—旅行記を中心として—
杉本 圭子

（本発表は2002年3月29日にパリ第3大学にて審査を受けた博士論文をもとにしている。）

スタンダードにおける文学ジャンルの概念という課題に取り組むにあたり、われわれはジャンルという概念は総じて相対的なものであり、作家により、その生きた国や時代により変化するものであるという前提に立つことにする。そして晩年に書かれた『ある旅行者の手記』、およびその続編『南仏旅行記』（1838）をスタンダードの一連の旅行記の到達点と見なし、これらが当時勃興しつつあった「フランス旅行記」というジャンル内においていかなる独自性を放っているかを、形式・内容の両面から考察することを目指す。

方法としてはまずスタンダードが過去の読書体験により培った旅行記の「型」というべき概念を探る一方で（通時的視点）、当時出版されていた他の旅行記の言説と比較しながら、フランス旅行記というジャンルをとりまく論争的文脈を明らかにする（共時的視点）。その後このふたつの視点の統合をはかりつつ、この論争的文脈に著者が具体的にいかなる形で応じているか、そしてそれが記述のレベルにどのように反映されているかを見るというものである。

スタンダードの日記、書簡、文芸批評の中から、彼が過去に読んだと思われる旅行記についての覚え書きを抜き出していくと、ある傾向が浮かび上がってくる。彼にとっての評価の基準は文体（自然な文体 / 誇張された文体）、描写の分量、その土地の風俗や芸術に関する理解度であり、その点でプロス裁判長の『イタリア便り』は生涯を通じて旅行記の規範とみなされる。こうした基準はスタンダード自身が旅日記をつける際のよりどころともなり、日記に残された断片的なメモにより、たとえば彼が「旅日記」(un journal de voyage)と「旅行案内書」(itinéraire)を厳密に区別していたことがわかる。すなわち前者は旅行中の様々な感興を書きつけるべき場であり、それに対して後者は情報提供の場である。従ってこのふたつをませこぜにするのはよくないことである、と。

実際、スタンダードのイタリア旅行記のうち『1817年のローマ・ナポリ・フィレンツェ』には私的な旅日記としての色合いが濃く、『ローマ散歩』(1829)は逆に名所案内としての色彩を強くもっている。『ローマ・ナポリ・フィレンツェ』(1826)、『ある旅行者の手記』はむしろそれらの中間体と見なすことができよう。

が、実際のところ「旅日記」と「旅行案内書」という二つの機能の完全な分離は、出版を前提とした時点で、言い換えれば読者の存在を想定した時点で困難にならざるをえない。現代のガイドブックにあたるジャンルがまだ完全には分化を遂げていなかったこの時代、旅行記の著者は各地の見どころや交通・宿泊事情などについて、最低限の情報を読者に提供する必要があったからである。一方、読者の存在はスタンダードの内により一層の「エゴチスム」への警戒を呼び覚ます。『ある旅行者の手記』の冒頭で、一人称で書くことについてそれがエゴチスムによるものではなく、ほかに手っ取り早い方法がないからだとわざわざ述べているのも、逆に見れば彼が旅行記を依然として「旅日記」の延長としてとらえていたことの証左となる。

「旅日記」と「旅行案内書」の二分法は、テキストのレベルでは「語り」(narration)と「描写」(description)の均衡という問題にもつながる。スタンダード生来の描写嫌いは、本質的に「descriptif」であることを免れない旅行記の分野にまで持ちこまれる。たとえば『ローマ・ナポリ・フィレンツェ』においては、自然や風物に関するある程度の幅をもった描写は非常に限られている。これには先行するテキスト群の影響もあろう。『ローマ散歩』においてかの高名ローマ平原の全容が示されることがないのは、明らかにシャトーブリヤンの「ド・フォンターヌ氏への手紙」の一節を意識したためである。だが、ガイドブック的効用を標榜する以上、古代建築物や絵画・彫刻に関してある程度の情報提供を行うことはやむをえない。その際、あまりに瑣末な考古学上の議論や情報に対してはこれを登場人物のあいだの会話に組み込んだり、またこうした一連の描写の解毒剤として、読者の気晴らしになるような逸話(anecdote)を頻繁に挿入するといった工夫がなされる。イタリア人の狂信ぶりを伝える逸話、情熱恋愛の事例、フランス人の虚栄心の愚かさをあげつらう逸話など、題材はさまざまであり、時としてこれらは敷衍され、短編小説の様相を呈することもある。フランスのサロン文化の清華である逸話という形式は、19世紀の文

学者に共通の「悪癖」である描写癖に対する緩和剤として、その効力を発揮する。

このようにして、イタリア旅行記で試みられた旅行記の「型」は、後年のフランス旅行記においても大筋で継承される。ただしスタンダールはそれらを漫然と反復するのではなく、フランス七月王政下の文化的・政治的・社会的状況に照らしたうえで批判的に選び取っている。すなわち形式・内容の両面において、支配的な言説である「流行」(la mode)への異議申し立てという側面が重視され、その結果エクリチュール自体も強い批評性を帯びたものとなる。それは例えば、自由主義経済の発達に伴う拝金主義の風潮、文化の質の低下を批判するために、金儲けにはいっさい興味のないディレタントの鉄商人を語り手に据えてみたり、偏狭なナショナリズムの蔓延に抵抗して、フランス人が自国の風景を美化して語る際につきもののレトリックをことごとく排除してみたりといった形であられる。この主観性、批評性こそがスタンダールの旅行記の最大の特徴であるといえよう。

「アルマンズ」執筆過程の検証 — (1)

内田 善孝

スタンダールの作品には手稿が残存するものと、印刷の後手稿が破棄された作品の2種類がある。「アルマンズ」は後者に属し、手稿がないので、執筆の過程を調べる研究は少なく、しかもその内容はスタンダールが書き残したメモによるだけである。手稿が残っていないという理由で、執筆過程を調べることはほとんど諦められていた。しかし手稿がなくとも執筆の過程を探ることは可能であり、そのよい例が福音書である。福音書には写本はあっても、手稿はない。それにもかかわらず編集史の研究は驚くほど進められている。福音書の編集史と比べれば、「アルマンズ」はわずか200年前の作品であり、この作品を取り巻く歴史的事実、作者の伝記的事実について、今日の我々は多くの情報を持っている。

執筆の過程が明確化されるとなると、いかなる利点があるのだろうか。まず「アルマンズ」の創作の本質が明らかにされる。この作品は1826年2月の第一段階、同年10月の第二段階に分けて執筆されたことが分かっているが、第一階段から第二段階にかけて同じテーマが継続されたのか、またはテーマの変更、発展があったのかも明確になる。とくに主人公の不能の問題をスタンダールがどう取り扱ったのかが分かり、「アルマンズ」における不能のテーマを正確に位置付けることが可能となる。

それではどのようにすれば手稿のない作品の執筆過程を探れるのだろうか。確かに「アルマンズ」の手稿は残存しないが、この作品は非常に特殊な性格を持っている。スタンダールがこの作品に付けた最初の副題はAnecdotes du XIXe siècleで、当時の歴史的事実を反映している。スタンダールがイギリスの雑誌に寄稿していた年代記事と同じ性格を持っている。1824年から1827年にかけて起こった出来事がこの作品を貫いて散在している。主人公の不能があまりに強調されすぎ、「アルマンズ」の年代的側面が見落とされている。3年間に及んでフランスの社会に起こった出来事が描かれているというこの事実こそ、手稿が存在しないこの作品の執筆過程を再構築する決め手となる。作品中に散在する歴史的事柄を年代的に整理して、二つの執筆段階、及び加筆修正の段階に当て嵌めていけば、どの章が、またはどの箇所がどの段階に執筆されたかが分かる。例を挙げると、すでに指摘されていることであるが、第4章でオクターヴはジムナズ座にle Mariage de raisonを観に行く。ところがScribeのこの作品は1826年10月10日が初演であるから、この箇所は第二段階、あるいは加筆修正の段階に属する。第4章になぜスタンダールはle Mariage de raisonを加筆したのかを分析することにより、作者の創作意図が明確になる。

執筆過程の研究は単に執筆の段階を明らかにするだけではなく、その真の目的は創作意図を段階毎に調べ、「アルマンズ」が変容していく過程を示すことである。執筆段階が2、あるいは3段階あれば、当然主題の変化、発展はあるはずで、「アルマンズ」の主題は不能であるという断言は意味をなさなくなる。

「『バルムの僧院』に見る絵画の魔術と不在の美学」

小林 亜美

「美とは幸福の約束に他ならない」とスタンダードは言うが、『バルムの僧院』はまさしく“美”に溢れた世界である。しかし、その美は常に描写の“失敗”―バルトの言う「文体のフィアスコ」―によってしか語られ得ない。スタンダードが人物の身体を描写しない作家であることは周知の通りであるが、『バルムの僧院』の目指したものが、最も描写の欠如した人物、小説の最後部に登場する幼児サンドリーノだったという事実は何を意味しているのだろうか。実際、『バルムの僧院』を「サンセヴェリーナ公爵夫人の物語」であると言いながら、スタンダードは私信の中で『バルムの僧院』に綴られているのは「ファプリスの生涯」であると明言し、さらにこの小説の目的を「サンドリーノの死」においているのだ。このような、“二人の主人公”及び“秘められた目的”の存在、さらにはテキストの“外部”における証言をめぐる問題は、『バルムの僧院』を読み解く上での重要な鍵となってくるように思われる。『バルムの僧院』のあらゆる美的世界とはどのようなものなのか、またそこに“約束”された幸福とはどのようなものなのか。その一端を、スタンダードにおけるイタリヤ美術の問題をひきつつ解き明かしてみたい。

『バルムの僧院』の登場人物たちは、具体的な身体描写によってではなく、コレッジョをはじめとする画家や絵画の名を引くことによって、あるいは髪や眼に代表される身体の細部によって示される。人物を一つの身体に固定し得ないこのような描写の方法、むしろ描写の欠如は、一種の“省略法 ellipse”であり、しかもそこに生じる換喩的作用によってそれ自体が充足ともなり得るようなものである。そして、具体的な描写を可能な限り省略された『バルムの僧院』の人物たちは、常に我々の眼差しに捕らえられることを拒み続ける。それは髪の色すら描写されないサンセヴェリーナ夫人において最大となるのだが、そのサンセヴェリーナ夫人ほどに我々の眼を引きつける人物はいないこともまた事実なのだ。美貌と才知の輝きによって絶えず何らかの事件を引き起こし、常にその中心にいるサンセヴェリーナ夫人の陰に隠れるように、主人公ファプリスは「主要人物でない主人公」となって、我々の、作中人物たちの視線の下をくぐってゆく。「主要人物でない主人公」というパラドックス、そしてサンセヴェリーナ夫人の強い存在感は、ジュネットの言う「内的不定焦点化」によって生じるものである。

こうして、『バルムの僧院』世界は“二つの中心”を持った世界と見えてくる。それは、唯一の中心を持つ円の世界―ルネサンス的世界―に対する楕円的世界、すなわち二つの焦点を持つ楕円ellipseという図形によって象徴される世界―バロック的世界―なのである。そしてそれが持つ「もう一つの中心」とは、「塞がれた、死の、夜の、盲目の中心、ものを芽吹かせる太陽の陽の裏返し、すなわち、不在の中心」に他ならない。こうしたバロック的美学は、スタンダードの作品の大きな特徴となっているのではないだろうか。

ところで、『バルムの僧院』における「不在の中心」の最たるものは、絵画にまつわるものであるように思われる。実際、『バルムの僧院』の重要ないくつかの場面には、絵画―とりわけルネサンス以後の絵画―への暗示的言及が認められるのだ。例えば、ファプリス毒殺未遂事件とクレリアの結婚直後という二つの場面、ファプリスがきわめて緊迫した状況におかれている二つの場面に登場する「バルミジャーノの有名な絵」。我々はこの「有名な絵」は＜長い首の聖母＞であると推察する。コレッジョについて熱心に語った一方で、バルミジャーノについてはあまり触れていないスタンダードであるが、＜長い首の聖母＞にはとりわけ強い関心を抱いていたと思われる節がある。そればかりか、この絵に表されている少年とも少女ともつかない天使、生気のない幼児イエス、残酷さを秘めた聖母、そして凍りついた視線は、『バルムの僧院』の一面と確かに重なり合うように思われるのである。コレッジョとバルミジャーノ、この二人のバルマ派の画家は、『バルムの僧院』において陽と陰の二つの中心をなしていると考えられるのではないだろうか。

さらに、スタンダードによってコレッジョの最高傑作とされたバルマ大聖堂の丸天井画＜聖母被昇天＞も、大きな問題を提起する。やはりコレッジョが描いた丸天井画のあるサン=ジョヴァンニ教会が、ファプリスの祖先ゆかりの教会として、また歌姫ファウスタとファプリスとの恋の舞台として数回にわたって登場する一方で、＜聖母被昇天＞があるバルマ大聖堂については、ほとんど気づかれぬ程度にしか触れられていない。しかし、大聖堂に言及する場面は、実は

ファブリスとクレリアとの視線の愛の始まりを告げるきわめて重要な場面と関わっているのである。ファブリスとクレリアとがファルネーゼ塔で味わう天上の恋は、視線による愛の恍惚にその頂点を見ることになるが、それは一種の“フィアスコ”でありながら“失敗”ではあり得ず、ファブリスとクレリアとの愛に特権的な幸福をもたらすものであると言えるだろう。このような、彼らの間に交わされる愛の視線、喜びに満ちた輝かしく軽やかな恍惚は、＜聖母被昇天＞の世界を思わせずにはいない。「バルムの僧院」における最大の「不在の中心」、それはこの＜聖母被昇天＞なのではないだろうか。

“美”に溢れた『バルムの僧院』、欠如に、不在に満たされた『バルムの僧院』は、紛れもなく一つの独立した小説作品である。ここにおいては、欠如ほど雄弁なものはなく、不在以上に輝かしい存在はあり得ない。そしてまた、スタンダールの他のあらゆる作品と同様に、“スタンダールの作品全体”の“一部”に過ぎない存在でもある『バルムの僧院』は、あらゆる意味で“脱中心化”された、“開かれた”テキストとしての無限感覚を我々に味わわせ、遙かなる虚空へと接近してゆく。そしてそこには常にある一つの“目的”、スタンダールの幸福という究極の終着点が秘められているのである。ここにははっきりと、バロック的美との類似が認められる。この『バルムの僧院』が、ファブリスの生涯が表しているのは、幸福への無限の接近にほかならない。それは、コレッジョの丸天井画＜聖母被昇天＞に見られる上昇の螺旋運動のように、目指すべき金色に輝く中心を持ち、限りなくそこに近づき続けながらも、決して到達はし得ないという運動であり、それ自体が美であるような運動である。“二重の中心”は永遠に合一を夢見続ける。オレンジの樹の育つ“母の国”イタリアは“脱中心化された中心”であり、“バルム”という夢幻の地にうつしだされる。そこで夢見られるのは、大聖堂に響き渡る“天使の歌声”のごとき、肉体を持たない肉体的快楽、限りなくコレッジョ的な“崇高な逸楽”、フィアスコによる充足である。こうして、「サンドリーノの死を目指して」書かれた『バルムの僧院』全体は、美しい被昇天図のように、“フィアスコ”を運命づけられた天使のような人物達を我々の眼前に描き出してみせているように思えてくるのである。

○研究活動報告（2002年4月1日～2003年3月31日）

（今回ご報告いただいたもので、スタンダールに関するものに限って掲載させていただきました。本研究会での発表要旨等、すでに『会報』に掲載されたものについては省略させていただきました。また「スタンダール変幻 作品と時代を読む」（慶應義塾大学出版会 2002年6月25日発行）所収の論文については、編集担当者(住谷)の方で確認をとるのを忘れたこともありまして、業績としてご報告いただいた方の分については本欄に記載するとともに、念のために折り込みで同著の掲載論文の一覧表を入れましたので、悪しからずご了承ください。）

石川 宏

- ・「スタンダールと『セント＝ヘレナのメモリアル』」（『スタンダール変幻 作品と時代を読む』所収 37-59頁）慶應義塾大学出版会、2002年6月25日発行）

井出 勉

- ・「スタンダールとオリエント～スタンダールの小説作品における《オリエント幻想》」日本フランス語フランス文学会 中部支部『研究報告集』No.27,2003年3月

岩本 和子

- ・「アンリ・ベールとその妹ポーリーヌ(15)」『流域』51号、青山社、2002.11 pp.22-31

宇田川和夫

- ・「ヴァニナ・ヴァニニをよむ」（『スタンダール変幻 作品と時代を読む』所収 37-59頁）慶應義塾大学出版会、2002年6月25日発行

内田善孝

- ・「『アルマンズ』における結婚と民法」成蹊大学一般研究報告、34巻、2002年7月
- ・「スタンダールの『アルマンズ』における女性抑圧と性愛(2)」愛知県立芸術大学紀要 No32、2002年3月

梶野 吉郎

- ・「逸脱の造形『アルマンズ』—スタンダールにおける小説言語—」(『スタンダール変幻』、慶應義塾大学出版会)
- ・《Avec la vivacité et la grâce》, dans *L'Année stendhalienne*, Honore Champion

粕谷 祐己

- ・ Sur <<Fragments divers>> de *De l'Amour*, in *L'Année Stendhalienne* 1, Champion, 2002
- ・「スタンダールの思想的意義—その生きた使い方」『スタンダール変幻』慶應義塾大学出版会 2002

下川 茂

- ・「スタンダールとマリー・アントワネット—隠された王家の悲劇—」(『スタンダール変幻—作品と時代を読む』日本スタンダール研究会編、慶應義塾大学出版会、2002年6月25日、139-159頁)

杉本 圭子

- ・「スタンダール変幻」(共著)日本スタンダール研究会編、慶應義塾大学出版会2002年6月(『鉄商人の見たフランス—反「流行」の書としての「ある旅行者の手記」—p.83-108)
- ・「『恋愛論』から『パルムの僧院』へ—スタンダールのイタリヤー—」『言語文化』第20号明治学院大学言語文化研究所 2003年3月 p.32-42

南 (富沢) 玲子

2003年3月15日に仏文学関東支部大会で口頭発表(今年度未発行予定)

山本明美

- ・「スタンダールの題名論(その5)—イタリヤ古文書179からの照射—」京都大学総合人間学部紀要2002年10月31日
- ・なお山本さんは6/27~29までToursで予定されているColloque Stendhal-BalzacIV-Moyen âge, Renaissance, Réformeで発表される予定だそうです。